

1. 高齢出産と育児、特に「離乳」との関連性

| | |
|----------|-----------|
| 母子保健研究部 | 水野清子・加藤忠明 |
| | 堀口貞夫 |
| 保健指導部 | 鍵孝恵 |
| 実践女子短期大学 | 藤沢良知 |
| 厚生省母子衛生課 | 大江秀夫 |

要約：1都6県の5～14カ月児（第1子）を持つ母親2553人を対象に、児の栄養法、離乳の実態および離乳に関する情報の入手等に関する質問紙調査を行い、これらに出産年齢が及ぼす影響を調べた。

①出産年齢は18～42歳に及んでいた。出産年齢の分布は18～24歳 16.1%、25～29歳 54.4%、30～34歳 24.1%、35～42歳（高齢出産群）5.3%であった。高齢出産群に家業・常勤者が僅かに多かった。②5～8カ月児の栄養法は、高齢出産群に母乳栄養が有意に少なく、人工栄養が多かった。しかし、9カ月以降では有意性はみられないが、高齢出産群では他の年齢層に比べ、混合栄養の割合が高く、人工栄養が少なかった。③高齢出産群では保健婦・栄養士の指導により離乳を開始する者が有意に多く、また、児の授乳・離乳食のリズムは規則的な割合が有意に高かった。④高齢出産群には「離乳の基本」に示されている食事回数に準じている者が多く、ベビーフードを適宜利用し、離乳も順調に進行していた。⑤高齢出産群では離乳に関する情報を入手する機会は有意に少ないが、公的指導機関と医療機関、または、医療機関から情報を的確に入手し、それを実行する者が多く、それが離乳の進行状況に好ましい影響を及ぼしている可能性が示唆された。

見出し語：高齢出産・栄養法・離乳の進行・情報の入手状況・情報源

Relationship of Labor at Higher Aged with Infant Rearing, Particularly with Weaning

Kiyoko MIZUNO, Tadaaki KATO, Sadao HORIGUCHI, Takae KAGI, Yositomo FUJISAWA, Hideo OHE

We investigated the age of mothers when the child was born, in relation to the method of feeding, the fact-finding of weaning and how the mothers obtained information concerning weaning, for the purpose of assessing the influence of the maternal age at the time of birth on these factors. A questionnaire survey was performed on 2552 mothers whose first child was between 5 and 14 months of age.

① The mother's age was 18-24 years in 16.1% of all mothers, 25-29 years in 54.4%, 30-34 years in 24.1%, and 35-42 years (the higher age group:HAG) in 5.3%. HAG had slightly higher percentages of mothers who were in business for themselves or were employed full-time. ② The percentage of mothers who breast-fed infants between 5 and 8 months of age was significantly lower in HAG. Bottle feeding was significantly more frequently used in this group. From the 9th month on after birth, mixed feeding was used more frequently, and bottle feeding was used less frequently in HAG, when compared with the other groups of mothers. ③ The percentage of mothers who started weaning under the guidance of a public health nurse or dietitian was significantly higher in HAG. The percentage of mothers who gave breast milk and solid food at a regular schedule to their infants was significantly higher in HAG. ④ The mothers in HAG more frequently followed the feeding cycle shown in "Basics of Weaning" and utilized baby foods appropriately, resulting in smoother weaning. ⑤ Although HAG had significantly less access to information concerning weaning, the mothers in this group tended to obtain appropriate information from public organizations, medical facilities or medical facilities, and to follow the instructions more faithfully. These attitudes of the mothers in HAG seemed to facilitate smooth weaning of their infants.

Key words: labor at higher age, feeding method, weaning, access to information concerning weaning,

I 研究目的

近年、女性の高学歴化や社会進出は結婚・出産に影響を及ぼし、出生数の減少と出産年齢の高齢化現象をもたらしている。

これまで産科医療の領域においても、また、母子関係の面においても出産年齢をめぐるいろいろな論議されている。特に、母体年齢と周産期および妊婦死亡^{1, 2)}、早産³⁾との関係、また、母体の高齢化に伴い、産科学的トラブルや合併症の発生頻度が上昇することが明らかにされている^{4, 5)}。しかし、これまでに、育児をめぐる出産年齢との関係について論じられている報告は少ない。そこで、出産年齢が育児、特に栄養法や離乳の進行にどのような影響を及ぼしているかを観察し、今後の保健指導に役立てたいと考えた。

II 調査方法および対象

宮城、埼玉、東京、神奈川、愛知、兵庫、福岡の1都6県に居住する5～14カ月児を持つ母親4634名を対象に栄養法、授乳のリズム、離乳の実態…離乳の開始月齢、離乳食回数、離乳の進行状況、離乳食調理、ベビーフードの使用状況など…および離乳に関する情報の入手等に関する質問紙調査を行った。

児の出生順位によって母親の児に対する養育状況が異なる可能性が考えられるので、今回は上述の対象の中、特に第1子の母親2553名を調査対象とした。

出産年齢は18歳から42歳であった。高年初産婦の定義については、WHOをはじめ多くの諸外国では「35歳以上の初産婦をいう」としているため、この年齢を柱に18～24歳、25～29歳、30～34歳、35～42歳の4段階に区分して分析を行った。出産年齢の分布はそれぞれ16.1%、54.4%、24.1%、5.3%であった。

出産年齢別にみた児の月齢別対象数を表1に示す。

表1 出産年齢別対象数

| 年 齢 (歳) | 総 数 (人) | 児の月齢別人数 (人) | | | |
|------------|------------|-------------|-----|------|-------|
| | | 5～6 | 7～8 | 9～10 | 11～14 |
| 18～24 | 412 | 127 | 120 | 104 | 61 |
| 25～29 | 1390 | 365 | 400 | 375 | 250 |
| 30～34 | 615 | 150 | 164 | 154 | 147 |
| 35～42 | 136 | 26 | 29 | 46 | 35 |

対象者の中、専業主婦が85.7%を占め、パート、家業、フルタイムはそれぞれ3.1、3.0、8.2%、35～42歳のグループに主婦専業の割合が幾分少なく(77.8%)、家業・フルタイムの者が僅かに多かった(17.0%)。

III 結果および考察

1. 出産年齢と児の栄養法との関係

出産年齢と児の栄養法との関係を表2に示す。5～6カ月児全体についてみると、母乳栄養は30.7%、混合栄養

表2 出産年齢別、児の栄養法

| 児月齢 (カ月) | 年 齢 (歳) | 対象数 (人) | 栄養法 (%) | | | χ^2 検定 |
|-------------|------------|------------|---------|------|------|-------------|
| | | | 母乳栄養 | 混合栄養 | 人工栄養 | |
| 5～6 | 全 体 | 668 | 30.7 | 24.1 | 45.2 | p < 0.05 |
| | 18～24 | 127 | 24.4 | 18.9 | 56.7 | |
| | 25～29 | 365 | 32.1 | 24.4 | 43.5 | |
| | 30～34 | 150 | 34.0 | 28.7 | 37.3 | |
| | 35～42 | 26 | 23.1 | 19.2 | 57.7 | |
| 7～8 | 全 体 | 713 | 23.8 | 16.5 | 59.7 | p < 0.05 |
| | 18～24 | 120 | 19.2 | 14.2 | 66.6 | |
| | 25～29 | 400 | 25.5 | 16.0 | 58.5 | |
| | 30～34 | 164 | 26.2 | 20.7 | 53.0 | |
| | 35～42 | 29 | 6.9 | 10.3 | 82.8 | |
| 9～10 | 全 体 | 677 | 9.0 | 19.4 | 71.6 | NS |
| | 18～24 | 103 | 8.7 | 17.5 | 73.8 | |
| | 25～29 | 374 | 9.1 | 18.2 | 72.7 | |
| | 30～34 | 154 | 9.1 | 21.4 | 69.5 | |
| | 35～42 | 46 | 8.7 | 26.1 | 65.2 | |
| 11～14 | 全 体 | 489 | 4.9 | 11.7 | 83.4 | NS |
| | 18～24 | 60 | 1.7 | 8.3 | 90.0 | |
| | 25～29 | 248 | 3.6 | 11.7 | 84.7 | |
| | 30～34 | 146 | 7.5 | 11.0 | 81.5 | |
| | 35～42 | 35 | 8.6 | 20.0 | 71.4 | |

養24.1%、人工栄養45.2%であった。乳幼児身体発育調査結果報告書⁶⁾による4～5カ月の栄養法は、母乳、混合、人工栄養がそれぞれ35.3、23.0、41.7%で、この調査結果を鑑みると本調査結果は妥当な割合であると思われる。出産年齢が25歳未満と35歳以上のグループでは、母乳栄養がそれぞれ24.4、23.1%で他の年齢層に比べ低率で、人工栄養が有意 (χ^2 検定 $p < 0.05$) に多かった。

7～8カ月になると母乳栄養、混合栄養の割合は5～6カ月よりさらに減少し、人工栄養が増加していた。出産年齢別にみると、5～6カ月の場合と同様に、25歳未満と35歳以上のグループに母乳栄養の割合が低く、人工栄養が有意 (χ^2 検定 $p < 0.05$) に多かった。この傾向は特に35歳以上の母親に顕著であった。

9カ月以降になると母乳栄養は9～5%に減少し、約3/4が人工栄養となっていた。この時期には5～8カ月時のような出産年齢による顕著な差はみられないが、35歳以上の母親では他の年齢層に比べ混合栄養の割合が高く、人工栄養の割合が幾分低い傾向にあった。高齢出産の場合、母乳育児の重要性を認識し、母乳栄養の確立に真剣に取り組む者の姿勢がこのような結果をもたらしたものと考えられる。加藤ら⁷⁾の報告によると、母が高齢になるに従い母乳栄養率は低下し、ことに乳児期早期に有意であった。今回の調査結果においても、児の月齢が低い5～8カ月に有意性が認められた。

2. 出産年齢と授乳・離乳食のリズム

睡眠・授乳・離乳食摂取の時刻は、離乳期の乳児にとって毎日の生活の柱になる。そこで児の摂食リズムを調査した。

摂食リズムには児の月齢差はみられなかったので、全月齢まとめて観察した。その結果、摂食リズムがほぼ一定の者の割合は、25歳未満のグループでは82.9%、25～29歳90.7%、30～34歳92.7%、35歳以上では94.8%と出産年齢とともにその割合は上昇し、その差は有意 (χ^2 検定 $p < 0.001$) であった。

加藤ら⁷⁾によると、生後6カ月時の授乳リズムは、母が高齢になるほど不定である割合が有意に高かったと報告しているが、この調査では第1～4子以上の児が調査対象になっていたことが、このような結果をもたらしたものと考えられる。

3. 出産年齢と離乳の実態

(1) 離乳開始月齢

離乳開始月齢を4カ月未満、4カ月、5カ月、6カ月、7カ月以降に区分して観察した。

全体についてみると、約80%は4～5カ月に離乳を開始していた。出産年齢別にみた結果を表3に示す。

表3 出産年齢別、離乳開始月齢

| 年 齢 | (%) | | | | |
|-------|--------|------|------|------|--------|
| | 4 カ月未満 | 4 カ月 | 5 カ月 | 6 カ月 | 7 カ月以降 |
| 18～24 | 9.6 | 31.6 | 45.7 | 9.0 | 4.1 |
| 25～29 | 8.6 | 33.2 | 46.8 | 9.0 | 2.4 |
| 30～34 | 7.8 | 33.6 | 47.6 | 7.8 | 3.2 |
| 35～42 | 5.5 | 29.9 | 44.9 | 15.0 | 4.7 |

いずれの年齢群においても、全体の3/4～4/5の者は4～5カ月に離乳を開始し、4カ月未満に開始した者は5～10%、7カ月以降は2～5%程度であった。出産年齢の若い母親では幾分離乳の開始が早く、35歳以上のグループでは6カ月以降の割合が高いが、有意差は認められなかった。

離乳開始のきっかけをみると全対象の41.2%の者は育児雑誌を参考にしており、医師・栄養士・保健婦等専門職の指導による者は少なかった。特に、出産年齢が25歳未満では35歳以上に比べ育児雑誌、家族や友人の育児経験、何となく離乳を開始した者の割合が高いのに対し、35歳以上ではこれらの割合は低く、保健婦・栄養士の指導による者が有意 (χ^2 検定 $p < 0.001$) に多かった。

(2) 離乳食回数

現在乳児に与えている離乳食回数を、「離乳の基本」⁸⁾に示されているものを基準にして比較した(表4)。この基本によると、5カ月1回食、6～8カ月2回食、9カ月以降3回食となる。それぞれの基準に達していない者を「基準以下」、基準通りを「基準群」、基準より進んでいる者を「基準以上」とした。

5～6カ月では約90%の者はこの基準に準拠しており、出産年齢との関係はほとんど観察されなかった。しかし、離乳が進行し、7～8カ月、9～10カ月になると、出産年齢によって食事回数にかなりの幅がみられた。すなわち、7～8カ月ではいづれのグループにおいても基準以下の者は11%前後であるが、基準通りの者は25歳未満の母親に比べ35歳以上のグループに多く、逆に基準以上は前者に多く、母親の出産年齢と離乳食回数との間には有意差が認められた (χ^2 検定 $p < 0.01$)。すなわち、7～8カ月時では出産年齢が25歳未満の場合に、離乳食回数の進め方が早い傾向にあった。

9～10カ月時では35歳以上群では「基準」の者が約80

表4 離乳食回数

| 児月齢 (カ月) | 年 齢 (歳) | 対象数 (人) | 離乳食回数 (%) | | | χ^2 検定 |
|-------------|------------|------------|-----------|------|------|-------------|
| | | | 基準以下 | 基 準 | 基準以上 | |
| 5 ~ 6 | 18~24 | 120 | — | 90.0 | 10.0 | NS |
| | 25~29 | 356 | — | 91.8 | 8.2 | |
| | 30~34 | 147 | — | 91.2 | 8.8 | |
| | 35~42 | 24 | — | 87.5 | 12.5 | |
| 7 ~ 8 | 18~24 | 116 | 11.2 | 43.1 | 45.7 | p < 0.01 |
| | 25~29 | 392 | 11.7 | 63.8 | 24.5 | |
| | 30~34 | 163 | 13.5 | 60.7 | 25.8 | |
| | 35~42 | 29 | 10.3 | 69.0 | 20.7 | |
| 9 ~ 10 | 18~24 | 101 | 38.6 | 58.4 | 3.0 | p < 0.01 |
| | 25~29 | 372 | 26.6 | 73.1 | 0.3 | |
| | 30~34 | 150 | 30.7 | 66.6 | 2.7 | |
| | 35~42 | 45 | 15.5 | 82.3 | 2.2 | |
| 11~14 | 18~24 | 60 | 10.0 | 83.3 | 6.7 | NS |
| | 25~29 | 238 | 10.1 | 85.7 | 4.2 | |
| | 30~34 | 145 | 5.5 | 90.4 | 4.1 | |
| | 35~42 | 34 | 2.9 | 97.1 | 0 | |

％、「基準以下」は16%であるのに対し、25歳未満では前者に属する者が約60%、後者約40%で、食事回数が基準に達していない者が有意に多かった (χ^2 検定 $p < 0.01$)。このような傾向は11~14カ月においても観察された。離乳食回数を増やすきっかけをみると、25歳未満では「児が欲しがるから」または「大人の食事にあわせて増やした」割合が高いのに対し、35歳以上では児の月齢を考慮したり、指導を受けて進める者が多かった。

4. 出産年齢と離乳の進行状況

(1) 離乳の進行状況

離乳の進行状況を「いつも大体順調」「過去に困ったことがあった」「現在、困っている」の3項目に分けて調査した。

児の月齢別に進行状況をみると、「大体順調な者」は5~6カ月児49.1%、7~8カ月児43.0%、9~10カ月児42.1%、11~14カ月児41.3%で、月齢の進行と共に僅かながら減少していた。一方、「現在困っている」者はいずれの月齢においても20~22%であった。

児の月齢別、出産年齢別に離乳の進行状況をみた結果を表5に示す。離乳を開始した当初5~6カ月時では、「いつも大体順調」な者は25~29歳のグループに

幾分多いが、出産年齢によって顕著な差は観察されなかった。有意ではなかったが、7カ月以降では「いつも大体順調」な者は35歳以上に多く、特に「現在困っている」割合は35歳以上に少なかった。離乳食のマンネリ化や中だるみがみられるこの時期において、高齢出産の母親は上手に対応している可能性が伺える。

過去または現在トラブルを持った、または持っている者についてその内容をみると、「食事の量が少ない」「与える量が分からない」など食事の量に関する問題がそれぞれ全体の30~38%を占め、「与えてよい食品の種類が分からない」「食べるのに時間がかかる」「食べ過ぎが心配」などがそれに続いていた。しかし、出産年齢とこれらのトラブルの内容について一定の傾向は認められなかった。

表5 離乳の進行状況

| 児月齢 (カ月) | 年 齢 (歳) | 対象数 (人) | 離乳の進行状況 (%) | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------|-------|
| | | | 順 調 | 困った | 困っている |
| 5 ~ 6 | 18~24 | 120 | 47.5 | 30.8 | 21.7 |
| | 25~29 | 349 | 51.6 | 30.1 | 18.3 |
| | 30~34 | 146 | 45.2 | 32.2 | 22.6 |
| | 35~42 | 25 | 44.0 | 44.0 | 12.0 |
| 7 ~ 8 | 18~24 | 116 | 46.6 | 37.9 | 15.5 |
| | 25~29 | 381 | 41.7 | 34.9 | 23.4 |
| | 30~34 | 154 | 41.5 | 35.1 | 23.4 |
| | 35~42 | 26 | 53.9 | 34.6 | 11.5 |
| 9 ~ 10 | 18~24 | 97 | 38.1 | 33.0 | 28.9 |
| | 25~29 | 364 | 43.1 | 36.0 | 20.9 |
| | 30~34 | 144 | 38.2 | 36.8 | 25.0 |
| | 35~42 | 41 | 56.1 | 34.1 | 9.8 |
| 11~14 | 18~24 | 59 | 40.7 | 35.6 | 23.7 |
| | 25~29 | 243 | 41.2 | 39.5 | 19.3 |
| | 30~34 | 139 | 39.6 | 42.4 | 18.0 |
| | 35~42 | 35 | 51.4 | 22.9 | 25.7 |

これらの問題解決に当たって、25歳未満群では家族に相談を持ちかける者が、他の年齢群では医師、保健所、市

町村・保健センター、電話相談等を利用する者が多かった。

また、問題が生じた場合の母親の気持ちを見ると、25歳未満群では36～40%の者は焦ったり、いらいらすと答えているが、35歳以上群ではその割合は26%と幾分低率であった。

5. 離乳食調理とベビーフードの使用状況

(1) 離乳食調理に対する母親の姿勢

離乳食調理に対する母親の姿勢を「特に何と言うこともない」「楽しい」「作る時間がない」「考えるのは面倒」「作るのは煩わしい」の5段階に分けて複数回答で調査した。

全平均で見ると、「特に何と言うこともない」「楽しい」者が約2/3、「時間がない」約10%、「考えるのは面倒」「作るのは煩わしい」合わせて半数を占めていた。出産年齢による相違を見ると、25～34歳では他の年齢層に比べ、「特に何と言うこともない」「楽しい」という積極派の割合が低く、「考えるのは面倒」「作るのは煩わしい」という消極派が多く、「時間がない」は30歳以降の年齢層に多く、これらに有意性が観察された (χ^2 検定 $p < 0.001$)。これは30歳以降の年齢では他の年齢層に比べ、フルタイムの者の割合が幾分高かったためである。

(2) ベビーフードの使用状況

ここ数年来、出生数は減少しているが、ベビーフードの生産量はかなりの伸びを示しており⁹⁾、乳児1人当たりのベビーフードの消費量は増加しているものと推測される。水野ら¹⁰⁾は既にベビーフードの使用と離乳の進行状況について報告しているが、ベビーフードの使用頻度は複合家族よりも核家族の方が、また、第1子の者は第2子以上の者よりも、ベビーフードの使用頻度が有意に高かった。そこで、出産年齢とベビーフードの使用頻度との関係を観察した。

月齢別についてみると、5～6カ月児では「ほとんど使用しない」者は27.9%、「毎日使う」者は29.4%、その他は週に1～4回くらい使用していた。7～8カ月になると「ほとんど使用しない」割合は変わらないが、「毎日使う」者が約7%減少していた。9～10カ月ではベビーフードの使用率は減少し、「毎日使う

」は10.8%、11カ月以降になるとその割合は4%不足になっていた。

出産年齢との関係を見ると、有意差は観察されなかったが、35歳以上のグループは25歳未満に比べ、いずれの月齢においても「ほとんど使用しない」割合が低く、「毎日使う」割合が高かった。高齢出産のグループでは適宜ベビーフードを使用して、離乳を順調に進めていることが示唆される。

6. 出産年齢と離乳に関する情報の入手

情報入手の機会を「機会なし」「時々有り」「良く有り」の3段階にわけて調査した。全平均についてみると「機会なし」はわずか4.0%、「時々有り」「良く有り」はそれぞれ71.2%、24.8%であった。出産年齢別にみた結果を表6に示す。

表6 離乳に関する情報入手の機会

| 年 齢 (歳) | 対象数 (人) | 情報入手の機会 (%) | | | χ^2 検定 |
|------------|------------|-------------|------|------|-------------|
| | | 機会無し | 時々有り | 良く有り | |
| 18～24 | 389 | 6.7 | 66.6 | 26.7 | p < 0.05 |
| 25～29 | 1310 | 3.5 | 72.4 | 24.1 | |
| 30～34 | 563 | 2.8 | 71.4 | 25.8 | |
| 35～42 | 121 | 5.8 | 72.7 | 21.5 | |

情報入手の機会の無い者は若年または高齢出産の母親に幾分多く、「良く有る」者は若年層に多かった。これらに有意性 (χ^2 検定 $p < 0.05$) が認められた。情報入手の機会が良く有る者の割合が35歳以上の母親に低いのは、家業・フルタイムの母親の割合が他の年齢層に比べ、高いことによるのかもしれない。

次に離乳に関する情報源を調査した(表7)。

表7 離乳に関する情報源

| 年 齢 (歳) | 情報源 (%) | | | | |
|------------|--|------|------|-------------------|-------------------|
| | 公的機関 ¹⁾ 医療機関 ²⁾ | 公的機関 | 医療機関 | 専門職 ³⁾ | その他 ⁴⁾ |
| 18～24 | 4.9 | 26.0 | 12.8 | 1.6 | 54.8 |
| 25～29 | 9.1 | 27.4 | 15.8 | 3.0 | 44.7 |
| 30～34 | 9.7 | 31.0 | 18.9 | 2.7 | 37.7 |
| 35～42 | 14.8 | 20.3 | 21.1 | 4.7 | 39.1 |

註：1) 保健所・市町村の医師・保健婦・栄養士

2) 病院の医師・看護婦・保健婦・栄養士

3) 保母・デパートの育児相談

4) 雑誌・育児書・テレビ・ビデオ・ラジオ・友人・親など

保健所・市町村の医師・栄養士・保健婦（公的機関と略称）、病院の医師・栄養士・保健婦（医療機関）、保育所の保母、育児相談施設（専門職）、雑誌、本・育児書、ビデオ・テレビ・ラジオ等のマスメディア、友人・親・姉妹（その他）に分け複数で回答を求めた。

全対象についてみると約45%の者は書物、マスメディア、周囲の者から情報を得ており、次いで保健所等の公的機関（27.7%）、医療機関（16.4%）、公的機関と医療機関両方（8.9%）であった。

出産年齢別では35歳以上群では公的機関と医療機関の双方、または、医療機関のみから情報を得る者が多く、30～34歳では公的機関を、25歳未満ではマスメディアや周囲の者から情報を得る者が有意に多かった。

さらに入手した情報の実行状況を、「大体実行する」「役立つが実行しにくい」「実行しないことが多い」「迷わされることが多い」の4項目に分けて調査した。

全体の65%は大体実行しており、実行しにくいという者は約1/3、実行しないことが多い、または、迷わされる者はそれぞれ8.2%、10.7%であった。出産年齢別にみると表8のようで、35歳以上の群は他の年齢層に比べ、大体実行する者が多く、実行しにくい、迷わされる者が少なかった。しかし、有意性は認められなかった。

表8 離乳に関する情報の実行度

| 年齢 (歳) | 対象数 (人) | 情報の実行度 (%) | | | |
|-----------|------------|------------|--------|------------|-------|
| | | 大体実行 | 実行しにくい | 実行しないことが多い | 迷わされる |
| 18～24 | 363 | 59.5 | 32.8 | 8.8 | 12.4 |
| 25～29 | 1264 | 65.6 | 30.1 | 8.5 | 10.7 |
| 30～34 | 547 | 66.4 | 33.6 | 6.8 | 10.2 |
| 35～42 | 114 | 72.8 | 28.9 | 9.6 | 7.0 |

染谷ら¹¹⁾は5～14カ月児を持つ4634名の母親を対象に、離乳食情報に関する調査を行った。それによると、情報源を公的機関と医療機関、医療機関とする者は情報源を実行しやすく、一方、周囲の者・マスメディアは実行しにくい、実行しないとする者が有意に多く、公的機関による者も同様な傾向が認められた。マスメディアによる情報の中には様々な問題が指摘されており¹²⁾、情報の誤りまたは画一的な情報提供が実行不可能という状況を生み出したのかもしれない。

以上の結果から、高年齢出産の場合、的確な手段で情報を入力し、それが離乳の進行状況に好ましい影響を及ぼしている可能性が示唆される。

文献

- 1) 相良祐輔：母体年齢と周産期死亡、周産期医学、21 (12)、1766～1768、1991.
- 2) 安達信博他：母体年齢と妊産婦死亡、周産期医学 21 (12)、1769～1774、1991.
- 3) 中谷剛 他：母体年齢と早産、周産期医学、21 (12)、1779～1782、1991.
- 4) 合坂幸三他：母体の高年齢に伴う産科学的トラブル、周産期医学、21 (12)、1799～1803、1991.
- 5) 佐藤 章他：加齢に伴う妊娠合併症に関する研究、厚生省心身障害研究報告書（ハイリスク妊娠に関する研究…主任研究者 武田佳彦）、5～9、1993.
- 6) 厚生省児童家庭局母子衛生課監修：乳幼児身体発育調査結果報告書、p48、1991、母子衛生研究会.
- 7) 加藤忠明他：保健指導のあり方に関する研究、①高年齢母親の乳幼児の育児、日本総合愛育研究所紀要、第29集、7～14、1993.
- 8) 今村栄一編：離乳の基本、18～20、1981、医歯薬出版株式会社.
- 9) (社)日本缶詰協会：ベビーフードの生産量（資料）、1992.
- 10) 水野清子他：ベビーフードの使用と離乳の進行状況、小児保健研究、52(6)、639～644、1993.
- 11) 染谷理絵他：離乳に関する情報と離乳の実態との関連性、栄養学雑誌投稿中.
- 12) 斎藤幸子他：育児情報に関する研究（第2報）、日本総合愛育研究所紀要、第27集、99～106、1990.

謝辞

研究をすすめるに当たり、調査にご協力いただきました江戸川保健所 小倉弘子先生、杉並東保健所 小野恵津子先生、鎌倉保健所 笹川祥美先生、宮城県庁 佐々木くに子先生、東村山保健所 鶴見田鶴子先生、伊丹保健所 藤田一美先生、麻生保健所 堀口育子先生に深謝いたします。